

猪名川治水の 基本的 考え方

中間とりまとめ抜粋(治水:猪名川部会)

1. 目標となる洪水流量に対して無害とすることから壊滅的な被害を防ぐこと(人命の損失・家屋の流出)へ転換し、氾濫、浸水を前提とした減災対策を行う。
2. 堤防の強化(下流部未整備区間の整備【※無堤地区は川西池田地区、堤防高不足地区はJR神崎川橋梁:第12回猪名川部会にて確認】、既存整備地区の破堤回避策の実施等)を行う。
3. 狭窄部については原則として開削は行わず、狭窄部上流の浸水対策を行うことが望ましいが、開削を行う場合と行わない場合において複数の選択肢を想定し、下流部の洪水時の被害状況や整備コストの比較を行うべきである。

中間とりまとめ(治水:委員会)

1. 今後は、いかなる降雨においても、壊滅的被害の回避を優先的に考える。すなわち、人命が損なわれることなく、また、家屋などの資産の損失は可能な限り少なくすることを目標とする。
2. そのためには、破堤回避対策の実施が必要である。また、洪水という自然現象を対象とするため、破堤回避の対策も万全でないことを十分認識し、万が一に備えて危機管理を行う必要がある。
3. 破堤回避対策を実施した場合、降雨状況によっては、ある程度の越水を想定する必要がある。こういった点を考慮した、したたかな街づくりを進める必要がある。
4. また、ある程度の堤防越水があると予測される場合、これに対応した社会制度上の対応策の検討が必要と考えられる。
5. 上下流の問題(琵琶湖・洪水調整ダムの水位管理、狭窄部の開削等)はそれぞれの地域の地理的・歴史的経緯や環境の保全などを踏まえ、総合的に見て最善となる対応を常に考える必要がある。

中間とりまとめ(治水:淀川部会)

狭窄部について

- 洪水調節機能の面からも自然景観保全の面からも、狭窄部の開削は避けなければならない。
- 狭窄部の治水対策としては遊水池による方法が最も望ましく、トンネルなどで流下能力を高める方法は下流の河道の流下能力を勘案して決定するべきである。